

## 歐陽脩書簡に見られる季節の挨拶をめぐって

東 英寿（九州大学）

### 一、はじめに

北宋の歐陽脩（一〇〇七～七二）には、植物や樹木を読み込んだ作が多い。たとえば「辨甘菊説」（『筆説』）、「希直堂東手種菊花十月始開」（『居士集』巻三）には菊花、「四月九日幽谷見緋桃盛開」（『居士集』巻三）、「小桃」（『居士集』巻十二）には桃花、「荷花賦」（『居士外集』巻八）、「荷葉」（『居士外集』巻六、七）には荷花、「鎮陽殘杏」（『居士集』巻二）、「和梅聖俞杏花」（『居士外集』巻六）には杏花、「榴花」（『居士外集』巻五）、「西湖石榴盛開」（『居士外集』巻八）には石榴花、他にも梅や芙蓉、檜、楠、松、柳、竹等、多くの草花や樹木が彼の作には読み込まれている。

とりわけ牡丹については強い愛着があるようで、「洛陽牡丹図」（『居士集』巻二）、「謝觀文王尚書惠西京牡丹」（『居士集』巻七）、「答西京王尚書寄牡丹」（『居士集』巻十三）、「禁中見 紅牡丹」（『居士集』巻十三）等があり、なかでも「洛陽牡丹記」（『居士外集』巻二十二）三卷は、牡丹の各品種や栽培方法について書かれた専門書と言ってよい。その「風俗記」に次のような記述がある。

春初時、洛人於壽安山斷小栽子。……接時須用社後重陽前。……澆花亦有時。或 用日未出、或日西時。九月旬日一澆、十月十一月二日一澆、正月隔日一澆、二月一日 一澆、此澆花之法也。

春の初めに、洛陽では牡丹の苗木を切り出し、牡丹の接ぎ木は春の社日の後から重陽の前までがよく、一日のうち水をやるのは日の出前か日の入り前がよく、更に水をやるのは、九月は十日に一回、十月、十一月は二日に一度、正月は一日おき、二月は毎日というように、牡丹の栽培を季節の移り変わりに従って記録しているのがわかる。歐陽脩は植物や樹木に関心があるので、月日の移り変わりや季節の変化に留意していたのであろう。

他にも「初寒」（『居士集』巻六）、「秋陰」（『居士集』巻十四）、「霜」（『居士外集』巻七）等の気候や天候を読み込んだ詩があり、特に雪について詠んだ詩は数多く、「詠雪」（『居士集』巻十一）、「春雪」（『居士集』巻十二）、「對雪十韻」（『居士外集』巻十三）、「雪晴」（『居士外集』巻四）、「雪」（『居士外集』巻四）、「喜雪示徐生」（『居士外集』巻三）等がある。

このように天候、気候や季節の移り変わりを感取っていた歐陽脩は、書簡にも季節や天候等について書き込むことが多い。本稿では、歐陽脩の書簡に季節や天候等がどのように記されているのかに注目し、それを手がかりとして、彼の書簡の作成過程の一端を明らかにしたい。

## 二、当時の書簡

歐陽脩の書簡は、『居士集』に十篇、『居士外集』に四十六篇、『書簡』に四百七十二篇が収録され、更に筆者が発見した書簡として九十六篇（新発見書簡）が存在しており、合計で六百二十四篇の書簡が今日に伝わっている。

さて、新発見書簡四十五「與蔡忠恵公」の冒頭は次のようである。

脩啓。氣候不常，動履何若？前日承惠《李邕碑》，字畫誠佳，輒已入録，多荷多荷。

「氣候は不順ですが、いかがお過ごしですか」という書き出しである。このように書簡において気候や季節を述べて書き始めることは現在でもよくあるが、それでは当時の書簡の書き方はどのようなであったのかということについて確認しておきたい。

中国で最も古い日用百科全書だと言われる、元の泰定元年（一三二四）に刊行された『啓劄青錢』卷一に、宋代の正式な書簡の書き方が掲載されている。

### 「手書一幅正式」

一具札、二呼称、三叙別、四瞻仰、五即日、六時令、七伏惟、八燕居、九神相、十尊候、十一托庇、十二入事、十三未見、十四祝頌、十五不宣

金文京氏の『漢文と東アジア—訓読の文化圏』によれば「①具札（初めのあいさつ）②呼称（相手の呼称）③叙別（無沙汰のあいさつ）④瞻仰（相手への思慕）⑤即日（季節のあいさつの導入）⑥時令（季節のあいさつ）⑦伏惟（8以下への導入）⑧燕居（相手の日常の描写）⑨神相（神に加護）⑩尊候（相手の健康への配慮）⑪托庇（相手のおかげで息災であることへの礼）これだけの前置きをして⑫入事（本題の用件）となり、最後は⑬未見（会えないことへの遺憾）、⑭祝頌（相手の健康の祈願）、⑮不宣（結び）でようやく終わる」ということである。『啓劄青錢』は元代に刊行されているが、引用されているのが唐代の資料なので、宋代には編纂されていたと推測されている。季節の挨拶に関連するのは、導入である「即日」、そして季節の挨拶である「時令」であり、書簡に季節の挨拶を記述することは、当時の書き方の一つの方法であったことがわかる。

確かにこれが正式な宋代の書簡の書き方であったのであろうが、こうした格式張った書簡以外に、歐陽脩は「與富文忠公」（『書簡』卷一所収）の中で、書簡について次のように述べている。

謂書者、雖於交朋間不以疏數爲厚薄、然既不得羣居相笑語盡心、有此猶足以通相思、知動靜、是不可忽。苟不能具寸紙、數行亦可。易致則可頻致、猶勝都不致也。

書簡は、思いを通じさせ、動静を知らせるもので、数行でもよいと述べている。『啓劄青錢』に掲載されていた書簡の形式とは対照的である。当時の書簡は格式張ったものから、ここで歐陽脩が言う個人的な些細なやりとりを記したもので多様な形式があったと考えられる。

### 三、書簡における季節の挨拶

さて、『歐陽文忠公集』所収の『書簡』四百七十二篇から、試みに季節や天候等の記載を列举してみると以下ようになる。

#### (書簡卷1)

仲秋漸涼、冬序極寒、季冬極寒、歲暮晴和、冬寒、冬候凝寒、秋暑尚繁、霜寒、秋暑、余暑尚繁、日夕風凜、早暮遂涼、氣節遂爾寒凝、冬序始寒、暑雨、春候暄冷

#### (書簡卷2)

孟春猶寒、仲夏毒熱、猛秋猶熱、季冬極寒、晴陰不常、大暑、秋寒以來、夏熱、秋氣稍涼、秋涼、經寒、經暑、秋暑尚繁、酷暑、余寒體氣清佳、頓涼、秋暑、仲秋漸涼

#### (書簡卷3)

初夏已熱、今夏暑毒非常、秋雨早寒、冬寒、春寒、經暑涉秋、秋寒、秋暑猶盛、仲夏炎毒、

#### (書簡卷4)

初涼、經寒、經夏涉秋、夏熱、春寒、自春氣候不常、初暑、經暑

#### (書簡卷5)

嚴寒、暖甚、余寒頗甚、春候猶寒、經暑、經寒、春氣暄和、經暑、經寒、春暄、窮冬、窮臘陰雪、氣候已寒、霜氣清冷、以立秋日卜秋暑多少、冬凜外體氣清和、涉夏秋體氣清適暑雨為孽、寒凝、秋冷、漸寒、

#### (書簡卷6)

酷暑如此、經夏大暑、陰雪不止、春寒、雪寒如此、大熱甚於湯火之烈兩日差涼、陰雨累旬、夕寒色尤盛、快晴、雨不止、經節陰雨

#### (書簡卷7)

三兩日毒暑尤甚、春暄、暑候已深、經春体氣清裕、春寒、寒凝、陰雨泥甚、稍涼、數日大熱、秋後慎生冷為佳、稍寒、酷熱中体氣清安、遽爾大熱、大熱

(書簡卷8)

春寒、夏熱、夏暑毒、陰寒、暑毒、大雨連綿、經寒、過午遂熱、秋暑、寒來、酷暑、經寒

(書簡卷9)

自夏涉秋今條冬矣、今夏京師大熱、近以雨水為患、陰雪、春夏之交氣候不常、秋暑、冒大熱、經寒、又值雪寒、時熱、酷暑、數日大熱、經寒、春寒、經此暑毒、秋暑、春和氣体清裕、春氣尚寒、秋寒、秋冷、春首余寒

(書簡卷10)

邇來暑熱、今日蔡州大風微雨

季節や氣候、天氣、あるいはその移り変わり等の自然狀況が、しばしば書簡に記述されているのがわかる。こうした季節の移り変わりや氣候、天候を書簡に書き込むのは、書簡の挨拶形式の一つとしての側面もあったであろうが、更に前述した如く歐陽脩が植物等の自然に関心があったことも関連しているであろう。その他に、歐陽脩の健康や体調との関連も見逃せない。たとえば、新発見書簡二十八「與呂正獻公」の全文は次のようである。

脩啓。佳雪可喜，寒中伏承台候萬福。辱手誨，欲枉旌騎訪戴之事，數百年未有繼者，曷勝爲幸！

第以泥濘，重有勞動，茲又慄愧也。人還，布謝，不悉。脩再拜知府侍讀侍郎執事。十日謹空。

脩十餘日左車牙痛，一兩日方能常食，滴酒不曾入口，寒中甚苦之，惟幸免酒也。惶恐惶恐。

美しい雪で喜ぶべきですが、あなたはご清祥のことと存じますと書き出し、あなたからの手紙を受け取ったこと、わざわざたずねてこられたことへの感謝を綴っている。最後に「寒中甚苦之」として、ここ十日余りあごや歯が痛み、寒さによって甚だ苦しんでいることを追伸として記述している。寒いという氣候が彼の身体に影響を与えていたようである。その他にも書簡の中には、季節や氣候と関連させて身体の調子を書き込むことが多い。たとえば嘉祐二年の「與吳正肅公」(『書簡』卷二)は次のようである。

酷暑中、承氣体清適。某自初旬内、嘗冒熱赴宿、為暑毒所傷、絶然飲不得、加以腹疾時時作。

暑さを冒して宿に赴いたことが原因で身体が疲労してしまい、飲むことが出来ないようになり、その上腹痛を起こしたこともわかる。暑いという気候を書き込むことによって、それに関連して自らの身体の不調へと記述が展開するのである。一方、気候の変化で身体が良くなったという記述もある。たとえば、嘉祐二年に呉正肅公に送られた別の書簡「與吳正肅公」(『書簡』巻二)では次のように記述する。

頓涼。伏計德履康裕。某病体得涼漸愈。

急に涼しくなったことが影響して、歐陽脩は体調が良くなったと記述しており、ここでも気候と身体の変化が密接に関連している。また、嘉祐四年の「與趙康靖公」(『書簡』巻三)では以下のように言う。

乃以今夏暑毒非常歳之比。壮者皆苦不堪。況早衰多病者可知。自盛暑中忽得喘疾。

夏の暑さは、病気がちの歐陽脩の身体にはこたえたようで、突然喘息の症状を発症した。喘息については『新発見書簡』二「與呂正献公」の中でも、

脩啓、以経夏涉秋雨、喘加以痰毒、風眩、居常在告。

と記述し、夏を経て秋雨が続く気候によって、喘息が起こり、しかも痰がでて立ちくらみが出るなど症状を悪化させていることが窺える。ここは、身体の調子について記述するために、気候の変化を書きこんだとも言えるだろう。更に、梅堯臣に与えた皇祐五年の書簡「與梅聖愈」(『書簡』巻六)には、「自春陰寒少晴明、病体不勝疲労」として、寒さは病気がちの身体にはこたえることを記述し、熙寧五年作の「與薛少卿」(『書簡』巻九)では「又值雪寒、難於挙動、加之病齒妨飲」として、雪の寒さの中、行動することが難儀で、それに加えて歯が痛み飲食を妨げると記述する。

このように、季節や天候、あるいはその移り変わりが歐陽脩の体調とともに書簡に書き込まれることは多い。歐陽脩は若いときから身体が丈夫でなかったようで、特に晩年は糖尿病を患い、眼疾や歯の疾患、手足の疾患で非常に苦しんでいる。従って、季節の移り変わりや気候の変化が体調に影響を及ぼしたであろうし、逆に病気のために季節の移り変わりを感じやすかった側面もあるであろう。かくの如く、季節や天候が体調に影響を与えたので、日常の些細なこと、特に自分の体調の具合を相手に伝える際に、季節や天候等の自然現象がしばしば書き込まれたと言えるであろう。

#### 四、『居士集』所収の書簡

このように歐陽脩は季節や天候等をしばしば書簡に書き込んでいるが、しかし『居士集』に収録されている書簡だけには、実はこうした記載が全く見られない。特に、季節や気候等が書き込まれることが多い冒頭部分を列举してみると次のようになる。

##### 「答陝西安撫使范龍圖辭命書」

脩頓首再拜啓。急脚至、得七月十九日華州所發書。伏審即日尊體動止萬福。夷狄侵邊、自古常事、邊吏無狀、至煩大賢。伏惟執事忠義之節、信於天下。……

##### 「答李詡第一書」

脩白、人至辱書及性詮三篇、曰以質其果是。夫自信篤者、無所待於人、有質於人者、自疑者也。……

##### 「答李詡第二書」

脩白、前辱示書及性詮三篇、見吾子好學善辯、而文能盡其意之詳。今世之言性者多矣。……

##### 「與荊南樂秀才書」

脩頓首白秀才足下。前者舟行往來、屢辱見過。又辱以所業一編先之、啓事及門而贊。……

##### 「答吳充秀才書」

脩頓首白先輩吳君足下、前辱示書及文三篇。發而讀之、浩乎若千萬言之多、及少定而視焉。……

##### 「上杜中丞論舉官書」

具官脩謹齋沐拜書中丞執事。脩前伏見舉南京留守推官石介為主簿、近者聞介以上書論赦被罷……

##### 「舉曾鞏論氏族書」

脩白貶所僻遠、不與人通、辱遣專人惠書、甚勤、豈勝媿也。示及見託撰次碑文事。……

##### 「答宋咸書」

脩頓首白、州人至、蒙惠書及補注周易、甚善。世無孔子久矣。……

このように『居士集』に収録された書簡八篇は、季節や気候の状況が記述されずに本題に入る。しかも、書簡の本文中、如何なる箇所においても季節や気候等の自然状況に言及することはない。これはどういうことを意味しているのだろうか。

それを考える手がかりとして、まず『居士集』の編纂過程を確認したい。そもそも、歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』百五十三卷は、南宋の周必大が、孫謙益、丁朝佐、曾三異、胡柯らの協力を仰いで紹熙二年（一一九一）から慶元二年（一一九六）までの六年の歳月をかけて編纂した。この『歐陽文忠公集』百五十三卷を構成する詩文集の一つが『居士集』である。参考までに『歐陽文忠公集』の構成をあげると以下の通りである。

『居士集』五十卷、『居士外集』二十五卷、『易童子問』三卷、『外制集』三卷、『内制集』八卷、『表奏書啓四六集』七卷、『奏議集』十八卷、\*『雜著述』十九卷、『集古録跋尾』十卷、『書簡』十卷。

（\*『雜著述』十九卷の内譯は、『河東奉使奏草』二卷、『河北奉使奏草』二卷、『奏事録』一卷、『濮議』四卷、『崇文總目敘釋』一卷、『于役志』一卷、『歸田録』二卷、『詩話』一卷、『筆説』一卷、『試筆』一卷、『近體樂府』三卷）。

このうち『居士集』五十卷部分だけは、歐陽脩自らが編纂をしていた。たとえば、次に挙げる『文獻通考』卷二百三十四、經籍考六十一の記事には、葉夢得の言葉を引いて次のように述べる。

石林葉氏曰歐陽文忠公晚年取平生所爲文、自編次。今所謂居士集者、往往一篇至數十過、有累日去取不能決者。

ここから、歐陽脩が晩年に自己の作品を何度も読み返し苦心して『居士集』を編次していたことが窺える。また、周必大も「歐陽文忠公集後序」（『平園續稿』卷十二）において次の如く記述する。

惟居士集經公決擇、篇目素定。而參校衆本、有增損其辭至百字者。有移易後章爲前章者。皆已附注其下。

『居士集』は歐陽脩により篇目が決定されていたこと、更に『居士集』に収録するに当たり、歐陽脩が自らの作に多くの修正を行っていたことがわかる。

『居士集』の書簡八篇は「書簡」と題されており、これは歐陽脩が「書簡」という篇目を決めて、自己の数多くの書簡の中から、『居士集』に収録するにふさわしい書簡を選別したことを意味してい

る。もちろん、『居士集』に収録されたこれらの書簡には当初から季節や気候の状況を書いていなかった可能性もあろう。ただ、『居士集』に書簡として収録した作の全てに季節や気候への言及がないということは、前述した如く他の多くの書簡に季節や気候の移り代わりを書き込んだ歐陽脩にとって、いささか奇異に感じられる。

そこで、『居士集』にどのような書簡が収録されたのかということを考えたい。それを考える手がかりとして、周必大らの『歐陽文忠公集』百五十三巻の編纂過程に注目したい。周必大らは、全集編纂に当たり、新たに『居士外集』と『書簡』という部立てを設けた（それら以外の全集の構成は、歐陽脩家に残された枠組みを利用している）。『居士外集』とは、歐陽脩が編纂した『居士集』の外集と位置づけられる部立てであり、『書簡』とは当然ながら書簡を収録する部立てである。歐陽脩家に残された資料に加えて、種々の資料から書簡を見つけた周必大らは、全集を編纂する際に基本的にはそれらを『書簡』に収録したが、『書簡』巻十の最後に附された校勘において次のように記述するのは注目される。

吉綿本書簡有論文史問古事之類、移入外集第十六十七十八十九巻中。

この校勘は、周必大らが見つけ出した資料の一つである吉綿本において、書簡に分類されていた作の幾つかを、全集を編纂する際に『居士外集』に移したという指摘である。その判断の基準として、書簡の内容から周必大らは「文史を論じ、古事を問ふ」をあげ、そうした内容を持つ書簡を『居士外集』に移したと述べる。部立ての名称から明らかな如く、周必大らは、歐陽脩が編定した『居士集』に倣って『居士外集』を編纂したのであり、つまり周必大らは歐陽脩の『居士集』に収録されている書簡は「文史を論じ、古事を問ふ」内容だと認識していたと考えられるのである。そうであるが故に、彼らも『居士外集』を編纂する際に、歐陽脩と同じくそうした内容を持つ書簡を全集の『書簡』部分ではなく『居士外集』に移して収録したのではないだろうか。「文史を論じ、古事を問ふ」内容とは、日常の些細な出来事を述べるのではなく、自らの見解や意見を述べるもので、いわば一つの「作品」と言える内容を持つものであろう。

前述した如く『居士集』を編定する際に、歐陽脩は自らの作を修正して収録していた。とすれば、書簡を『居士集』に収録する際にも修正を加えることもあったであろう。「文史を論じ、古事を問ふ」内容となるように、歐陽脩が書簡の文章や表現を修正したことは十分に考えられるのである。

事実、歐陽脩は書簡にしばしば修正を加えている。たとえば『歐陽文忠公集』の『書簡』に収録される「又（與劉侍讀）」其二十六に着目したい。全文は以下の通りである。

某啓。賈常行，嘗附狀。辱書，承經暑動履康和。兼蒙惠以《韓城鼎銘》及《漢博山槃記》，二者實爲奇物。某集錄前古遺文，往往得人之難得，自三代以來，莫不皆有，獨無前漢時字，每以爲

恨。今遽獲斯銘，遂大償其素願，其爲感幸，自宜如何。屬患膝瘡，家居絕客，無人爲識古文。故第於郵中粗報已受二銘之賜，篆書當徐訪博識尋繹，續得附致。其餘區區，萬不述一，大熱慎護，以副瞻勤。清水安能久滯耶，實負愧也。

これに対して、次の新発見書簡四十二を確認したい。

（新発見書簡）四十二與劉侍讀 見履常齋石刻

脩啓。近賈常行，曾致拙問。辱書，承經暑動履清勝，少慰瞻勤。兼蒙惠以韓城鼎銘、蓮勺博山槃記，不意頓得此二佳物。脩所集錄前古遺蹟，自三代以來，往往有之，獨無前漢時字，常以爲恨。今遽獲斯銘，遂大償素願，乃萬金之賜也。屬患（膝）瘡數日，家居絕客，無人爲辨古文，當徐訪博學者識之，續錄寄上。今且於郵中致此粗報，已獲佳貺爾。今歲大熱，疫病尤覺難支。西州高爽，更冀慎護，以副區區，不宣。脩再拜原甫安撫學士坐前。廿一日 謹空。

これらの書簡は、長年欲していた漢代の遺物を入手した歐陽脩が、その送り主である劉敞に感謝を述べたもので、今は膝の病気のため詳しくは考察できないが、詳しいことが明らかになれば連絡をするということも書かれており、ほぼ同じ内容で同一の書簡ではないかと思わせる。ただ、文章表現に違いがあるので、まず以下の部分の違いに着目したい。

（『歐陽文忠公集』）「又（與劉侍讀）」其二十六

某集錄前古遺文、往往得人之難得、自三代以來、莫不皆有。獨無前漢時字、每以爲恨。

（新発見書簡）四十二「與劉侍讀」 見履常齋石刻

脩所集錄前古遺蹟、自三代以來、往往有之、獨無前漢時字、常以爲恨。

この部分、新発見書簡四十二の方が字数が少なく簡潔な表現になっている。「又（與劉侍讀）」其二十六では「私は前古の遺文を収録し、往々にして人が入手するのが難しいものを入手し、三代以来入手していないものはない。ただ前漢の時代の作だけでなく、常に恨みに思っている」となり、一方新発見書簡四十二では「私が集めた前古の遺蹟については、三代以来往々にして入手しているが、ただ前漢の時代の作だけでなく、常に恨みに思っている」となり、新発見書簡四十二の方が引き締まり、その文章が簡潔になっているのがわかる。しかも、「又（與劉侍讀）」其二十六では歐陽脩が手に入れた遺物の一つが、「漢博山槃記」と記載されているが、新発見書簡四十二では「蓮勺博山槃記」となっており、「漢」という漠然とした記述から「蓮勺」という具体的地名に変更されており、内容が深化

しているのが窺える。つまり、この二つの書簡は、「又（與劉侍讀）」其二十六に歐陽脩が修正を加え、新発見書簡四十二「與劉侍讀」が出来上がったのではないかということを感じさせるのである。

更に、新発見書簡四十二「與劉侍讀」には、最後に相手の宛名「原甫安撫學士坐前。廿一日 謹空。」が記載されているということから、新発見書簡四十二「與劉侍讀」は直接相手に送られた書簡であることが窺える。しかも、新発見書簡四十二「與劉侍讀」では、歐陽脩が自らのことを「脩」と言っているのに対して、「又（與劉侍讀）」其二十六では諱を避けて「某」と記載されていることも看過できない。「某」を用いることについて、范志新『避諱学』には次のごとく述べる。

父祖諱通常稱家諱。此類避諱與古代宗族制下的祭法、喪服制度、有內在的關係。……文人避家諱、以史學著作與文集為常見。

今案：書某避諱・其例亦古。尚書已啓其端。……

古代の祭法では父祖の諱を避けるのであり、「又（與劉侍讀）」其二十六に「某」と記載されていたことは、それが歐陽脩家に残されていた資料であったことを端的に物語っている。つまり、この二通の書簡は、全集収録の「又（與劉侍讀）」其二十六に、歐陽脩が修正を加えて新発見書簡四十二を作成して相手に送付したという関係になる。家に残されていた「又（與劉侍讀）」其二十六は、後に周必大が見つけ出して全集に収録したのであった。このように、新発見書簡によって書簡の具体的修正例が窺えたことから見ても、歐陽脩は書簡を作成するに当たってしばしば修正を行っているのは間違いないであろう。

以上、歐陽脩は『居士集』編纂の際に自己の作に何度も修正を重ねたこと、書簡も修正を施すことを厭わないこと、更に『居士集』には「文史を論じ、古事を問ふ」内容を持つ書簡が収録されていること、これらを考え合わせると、『居士集』に収録された書簡は、はじめから季節や気候の記述がないものもあったかも知れないが、その大部分は歐陽脩が『居士集』を編纂する際に、選録した書簡に修正を加え、その過程で季節や気候等に関する記述が削除されたと考える方が自然ではないだろうか。

## 五、おわりに

南宋の沈作喆『寓簡』巻八の次のように記述する。

歐陽公晩年、嘗自竄定平生所為文、用思甚苦。其夫人止之曰、何自苦如此。當畏先生嗔耶。公笑曰、不畏先生嗔、却怕後生笑。

歐陽脩は死ぬ直前まで自己の詩文集『居士集』五十巻を編纂し、文章の修改や作品の確定を行って

いた。それを見かねた夫人が、どうしてそのように苦しんでまで編纂をしているのかと尋ねたところ、後世の物笑いにならぬようにと歐陽脩は答えた。このように自分の作を後世にしっかりと伝えることを意識して編纂した『居士集』に、歐陽脩は書簡のうち「文史を論じ、古事を問ふ」内容が表れた作を収録しようとし、自らの多くの書簡の中から代表作を選びすぐったと考えられる。更に、それらの書簡に自らの意見や見解が明確に表われるように内容や表現に修正を施したのではないだろうか。意見や見解が表れた代表作に仕上げるためには、歐陽脩は自らの議論とは無関係な季節や気候等の記載はもはや不要なものとし、削除したと考えられる。『居士集』に収録された書簡は、分類は書簡ではあるが、歐陽脩の意識の中では、日常の些細な個人的出来事を述べた書簡と言うよりも、後世に残すべき自己の見解や意見を表出した代表的「作品」だったのである。